

雜藥

ゆ、腸胃を潤し、氣血を益すの良糕なり、今は地黄の汁を用ひずといへども、此名を以す、京稻荷前にて專製之、江戸にては下り飴と稱す、

〔扶桑略記二十三〕仁和五年八月己巳日、又相撲事、從栢原天皇武、桓御代至今、代々天皇皆盡好之、貞

觀以後寂然無音、今聖主不捨之、亦不樂乎、朕本自筋力微弱、而無可敵者、今亂國之主而莫不日致愚慮、每念萬機、寢膳不安、爾來玉莖不發、只如老人、依精神疲極、當有此事也、左丞相答云、有露蜂者、命宗繼調進、其後依彼詞服之、其驗真可言也、

〔雍州府志六〕齒牙藥略○中 又一種有御坊藥、凡本朝京師邊有五三昧、主土葬及火葬之者、是稱御坊、此事始僧徒勤之、倭俗僧謂御坊、近世僧徒使葬場之土人為之、故今雖束髮人又稱御坊、傳言此人

有新死之者、則尋其病若有積聚癥瘕、入火不燒者、竊取其不燒之癖塊、再燒為霜、授其有病者、是從治之法乎、凡御坊之於治療也、多此類乎、今專稱御坊藥師、又謂御坊藥

〔昔物語延寶天和〕一昔六七十年前以前、みいらといふ藥大きにはやり、歴々衆大名も吞む、下々も吞、癩氣痞に

能く虛性を補ひ、脾胃を調へ、氣力を強くし、食傷其外諸病に能とて吞ざる人なし、方々の藥種屋にて賣、赤坂みいらとて、赤坂に大坂屋と云生藥屋、下直に賣、皆調て吞ける、代は長崎屋、杯にて廿双三十双、杯に賣、十五双計のもの有、赤坂みいらは五双三双に賣る、何か藥種二三種に松脂にて煉たる様なる藥なり、病氣にはきかず、又あたりもせず、何の益なき藥なり、七八年殊の外はやりて、段々止し、

藥性

〔運步色葉集屋〕藥性

〔政事要略七十一〕新修本草第一云、藥有君臣佐使、以相宣攝合和者、宜用一君二臣五佐、又可用一君

三臣九佐、本說如此、今案猶如立令制、若多君少臣多臣少佐、則氣力不同故也、而檢仙俗諸方、亦不必皆爾、養命之藥則多君、養性之藥則多臣、療病之藥則多佐、猶依本性所主、而兼復斟酌詳用、此者、益